

(1) 科目の紹介

科目名	看護学概論	開講年度：2010 開講学期：前期 曜日校時：木3 単位数：1	専門 演習 必修
教員名（所属）	基礎看護学教員4名とほかの領域の教員3名（看護系教員） 計7名		
対象学部・年次	1年生	受講人数：70名	
授業のねらい	事実に基づいて考える 自己学習能力を養う 共同で学習する力を養う		
授業の方法	10名1グループにチューター役の教員1名がついて、演習室で学生主体の学習を行う。		
おもなアクティブラーニング手法	Inquiry Based Learning (IBL) *別添資料を参照		

(2) 学修評価について

到達目標	概論の中で4回の講義時間を当てて実施している。目標は、学年の早い時期に自発性と自己学習能力、論理的思考を刺激する授業を提供することにある。
成績評価の方法	教員評価(毎回)・自己評価(毎回)・ピア評価(毎回) 教員評価はコメントもつけて、次回に返却する。評点は別紙に残して総合点を教員の評価点とする。自己評価とピア評価は合計点を平均化して採点する。

(3) 授業進行の概要と詳細

授業進行の概要	IBLは、①目的に沿った事例を作成 ②事例のタイトルを決めてリソースなどを提示した資料作成 ③事例のまとめ（問題解決後の状況も入ったもの）④事例のまとめから数行の情報が入ったパートを3から4作成。パートごとに<事実><仮説><必要な情報><調べる項目>に分けて進行していく。 学生には、IBLの手引きを作成してオリエンテーションを行う。教員にはチューターの手引きを作成。パートの作成は、そのパートで何を学ばせたいかを明確にして情報を入れる。学生の思考に偏りや学ばせたいことに全く触れない時のために、チューターガイドを作成しておく。 資料 ①IBLの進め方 ②学生用ガイド ③チューターガイドとパート、事例のまとめ
---------	--

(4) 授業の成果

22年度学生評価(n=68)

成績の分布 (円グラフなど)	学生はAAが90%を占めている(過去3年間共通)、欠席をするとAあるいはB評価となる。
学生の授業評価 (レーダーチャートなど)	授業評価は高い。記述式の評価にはじめは難しく感じるが、面白くなってくるという意見が多い。しかし、学習が身につかなかったと考えている学生もいて、高校卒業して2ヶ月程度では、教員から学ぶのが学習という意識がまだ残っているためではないかと考えられた。
全体の振り返り	IBLは、進行の手順や学習の進め方が明確になっている方法なので、学生が1度体験すると2回目からは運営が非常にスムーズであった。準備のコアとなる教員が、グループに必要な備品(模造紙やマグネット、ペン、パート)などを事前準備して学生が指定の場所から持っていくという一連の動きが、最初はなかなか動きが悪い。学生は指示待ちの傾向が強いので、事前に説明していても誰が取りに行くか決めるのに時間がかかるようである。2回目からは、驚くほど改善していたので授業への関与度がたかまると学習姿勢も改善して早めの準備、自主的な動きができるようになるのではないかと教員間では評価していた。意見も予想外に積極的に出てきて書記が書くのに間に合わないことが多く、そこをどう工夫するかも学生に任せているが、時々チューターの介入も必要なケースもあった。一つの考えに、一人の意見に引っ張られることも懸念していたが、杞憂であった。なかなか自分の意見を言えずに、毎回最後に行く振り返りでそれを自分の課題とする学生は1Gに1-2名はいる。次回に改善できる学生と最後まで意見が言えない学生がいた。そこにどうかかわるかチューターのかかわりの難しさとして指摘があった。
今後の改善点	事例を作成するためのトレーニングが必須である。また、チューターの役割を理解していても、つい教えてしまいがちな教員もいて黙って見守ることのむずかしさを指摘する教員もいた。事前に、シュミレーションをして学生の気持ち、チューターの役割を体験するように配慮したが、やはり、研修に行く、講師を招聘するなどのFDの充実が必要である。 ちなみに、看護領域では、2011年には準備が遅れ事例作成が困難になった。その影響もあり2012年からはTBLに変更となっている。この変更は、学生の評価によるものでも、教員がIBLの教育効果に疑問を持ったためでもなく、マンパワーの限界の中で継続して準備をすること、特に事例作成のむずかしさが大きな要因である。

	全くそう思わない	そうは思わない	どちらともいえない	そう思う	強くそう思う
1)IBLの説明はよくわかった	1(1.5%)	3(4.4%)	9(13.2%)	40(58.8%)	15(22.1%)
2)大の授業を受けた感じがする	0(0%)	2(2.9%)	10(14.7%)	32(47.1%)	24(35.3%)
3)知識が身につかなかった	18(26.5%)	39(57.4%)	5(7.4%)	5(7.4%)	24(35.3%)
4)チューターは思考を高める役割を果たしたか	0(0%)	3(4.4%)	1(1.5%)	40(58.8%)	24(35.3%)
5)チューターは学生の反応をみていない	28(41.2%)	33(48.5%)	6(8.8%)	1(1.5%)	0(0%)
6)安心感がある	0(0%)	5(7.4%)	8(11.8%)	46(67.6%)	9(13.2%)
7)どのように進めてよいのかわからなかった	8(11.8%)	28(41.2%)	17(25.0%)	14(20.6%)	1(1.5%)
8)肯定的な刺激を受けた	0(0%)	1(1.5%)	2(2.9%)	36(52.9%)	29(42.7%)
9)このチューターからもっと学びたい	1(1.5%)	0(0%)	12(17.6%)	34(50.0%)	21(30.9%)
10)グループ内の学生と共同できた	0(0%)	1(1.5%)	3(4.4%)	25(36.8%)	39(57.4%)
11)学生数は妥当である	0(0%)	3(4.4%)	2(2.9%)	28(41.2%)	35(51.5%)
12)この授業を新1年生にも薦めたい	0(0%)	0(0%)	5(7.4%)	31(45.6%)	32(47.1%)
13)考える力がついた	0(0%)	1(1.5%)	1(1.5%)	34(50.0%)	32(47.0%)
14)この授業は興味あるものであった	0(0%)	2(2.9%)	3(4.4%)	31(45.6%)	32(47.1%)
15)自分で調べる力がついた	0(0%)	2(2.9%)	4(5.9%)	27(40.0%)	35(51.5%)
16)この方法では学習意欲が湧いてこない	24(35.3%)	31(45.6%)	4(5.9%)	4(5.9%)	5(7.4%)

(5) アクティブ・ラーニングの充実に向けた提案

ポイント提案	IBL に関しては、IBL を体験するとその後のグループワークでも自発性が高い学生が多く育つなど肯定的な意見も多かったものの、事例作成が大仕事であった。事前準備をしっかりとる計画性と、教育専任教員を作るなどの改善が継続には必要である。
参考になる資料	IBL に関しては、英語のガイド書がありアマゾンで購入可能 {IBL} 日本では、看護系の雑誌などのバックナンバーに総論として記事がいくつかある。